

聖書:ルカの福音書11章14~28節

説教:天からのしるし

はじめに

ロシアがウクライナに軍事侵攻し、数日前には原子力発電所を攻撃したと聞き、世界はこれからどうなるのかと不安を覚えない人はいないでしょう。目に入るもの、耳に聞こえてくるものでうろたえてしまいますが、実は聖書では、終末が近くなるとこのようなことは必ず起こると書かれています。すでに預言されているのです。とは言っても、不安がなくなるわけではありません。子供たちの将来のことを思えば、やっぱり平和な世界であって欲しいと願わされるのです。このようなとき、もう一度聖書を通して神が今私たちに何を語ろうとされているのか、耳を傾けたいと願います。

1 イエスと悪霊の戦い

1) ベルゼブルの仲間?

あるとき、イエスが口をきけなくする悪霊を追い出したのを見て、周りにいた人たちは驚くのですが、一方では冷ややかな目をしながら疑う人たちもいました。「悪霊どものかしらベルゼブルによって、悪霊どもを追い出しているのだ。」悪霊の社会も階級制になっており、下っ端の悪霊と偉い悪霊とに分かれていて、ベルゼブルはその一番のかしらです。イエスはこのベルゼブルと同盟を結んで悪霊どもの仲間となり、下っ端の悪霊に命令して悪霊を追い出しているのだと、言いがかりをつけます。

これに対して、イエスは二つのポイントから反論します。一つ目。もし悪霊のかしらを使って追い出しているのなら、どうなるか。仮にそうだというのなら、悪霊の社会が内輪もめしていることになり、サタンの国は立ちゆかなくなるだろう。二つ目。イエスは「あなたがたの子ら」と言っています。これは悪霊を追い出すのを職業としている人たちのことで、もしあなたがたの言っていることが正しいのなら、その人たちもベルゼブルを使って追い出していることになる。そんなことを言ったら彼らは文句を言うだろう。イエスはこのよう彼らの矛盾を指摘します。

2) 神の指で

では、イエスはどうやって悪霊を追い出していたのか。20節。「わたしが神の指によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがた

のところに来ているのです。」その後「もっと強い人が襲って来て」という話しが続く。この話しをまとめると、ベルゼブルよりも強い者が来て彼らに打ち勝ったから悪霊が出ていった。そういうことを言おうとしています。

さてここに出てくる「もっと強い人」とはいったい誰なのか。そこで「神の指」ということばに注目します。この表現は聖書で二箇所しか出てきません。一つは出エジプト記で、モーセがファラオの前で不思議なことを行ったときに、エジプトの呪法師たちは真似しようとしてもできなくて、「これは神の指です」(出エジ8章19節)と語った場面。もう一つは申命記で、モーセが「主は、神の指で書き記された石の板二枚を私に授けてくださった」(申命記9章10節)と語るころ。いずれも神ご自身が直接に奇跡を起こしてくださった場面です。イエスは「神の指で」と、まるで自分は何もしていないかのように語っています。でも、奇蹟を起こしているのはイエスご自身であることは、素直で自然な見方をすれば誰もが認めるはずですが。

3) 敵か味方か

ところが、イエスの奇跡を見せられてもどうしても認めたくない人たちも出て来て、イエスはベルゼブルの仲間だと言ったり、天からのしるしを見せろと要求します。

ときどきひいきの野球チームのことでけんかになることがあります。これもそれと同じことか。いや、全然違う。巨人か阪神かの違いがあっても救いには関係ありませんが、イエスがなされたことを認めるか認めないかでは大変な違いが生じます。23節。「わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしとともに集めない者は散らしているのです。」これをひとことで言えば、「敵か味方か」二つに一つしかない。私たちはそのうちのどちらかを選ばなければならない。なぜこのような厳しい選択を迫るのでしょうか。

4) もっと強い人が襲って来て

その理由が24節以降に書かれています。少しわかりにくいので説明が必要です。イエスの時代、悪霊で苦しんでいれば、呪法師とか祈祷師が来て悪霊を追い出していました。先ほどの「あなたがたの子ら」がこれで、悪霊が出て行くと誰もが、「これで解決。よかった」と思う。ところが喜ぶのは早

い。追い出された悪霊はどうなるか。しばらくあちこちさまよい歩いて、どこにも休むところがないとわかると、他のもっとたちの悪い悪霊を誘い込んで元のところに戻り、以前よりもっと悪い結果になってしまう。それで問いかけている。「そうならないためには、どうしたらよいか。」

悪霊を追い出してもらえらるなら、祈祷師でも呪術師でも、どんな宗教でもよいのか。それではもっと悪くなるばかり。解決はただ一つ。もっとも強い人でもお願いするしかない。なので「どちらでもよい」というような曖昧な態度はとれなくて、「イエスの敵か味方か」、二つに一つを選択しかない。

2 神の国

1) どこにあるのか

イエスの味方になろうとしない人たちは言いました。「神の国はどこにあるのか。天からのしるしを見せて欲しい。そうしたらイエスの味方になってやろう。」

私たちはどうでしょう。新型コロナウイルスの感染がなかなかおさまらない。それに加えて、世界を巻き込むような戦争が起きていく。自分の目の前にある問題が解決するどころか、ますます深刻になっていくようなとき、神の国と言われても、そんなものはどこにあるのかと言いたくなる。でも20節。「しかし、わたしが神の指によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。」

神の国は、すでに私たちの目の前に来ているというのです。でも見えない。どういうことか。このことについてイエスは、ルカ17章20、21節でこう語っておられます。「神の国は、目に見える形で来るものではありません。『見よ、ここだ』とか、『あそこだ』とか言えるようなものではありません。見なさい。神の国はあなたがたのただ中にあるのです。」

2) 神のことばを聞いて守る人たち

「あなたがたのただ中」の「ただ中」は、「コップの中」と同じ意味ですから、まさに神の国は私たちの内側にあるというのです。そしてもうひとつは、「あなた」ではなく「あなたがた」と言っているところです。ひとり一人のうちにあることはもちろんですが、教会という集まりの中にある。そのようにとらえることもできます。「あなたがた」と呼ばれる人たちは何をしているのか。28節。

「幸いなのは、むしろ神のことばを聞いてそれを守る人たちです。」

神のことばを守る人たちとあります。すぐに思いつくのは、聖書に書かれている教えをすべて守ること。でも、イエスは、律法を守っていると思い込んでいたパリサイ人を厳しく批判しました。神のことばを守る人たちは幸いだと言いながら、守ってまずと主張する人たちは痛烈に批判する。いったいどっちなんだ、ということになる。

3 聖霊

1) 聖霊による励まし

それで13節後半を読みます。「ですから、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っています。それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」

前回も触れましたが、私たちは救われて聖霊をいただいているはずですが、聖霊がおられると実感することはあまりない。これはどういうことなのか。こんなふうに例えるとわかりやすい。窓を閉め切った状態で部屋から外にある木の枝が揺れているのが見えるとします。そうしたら、窓を開けなくても外では風が吹いているとわかる。聖霊もそれと同じです。聖霊そのものは目には見えませんが触れることはできない。でも聖霊の風が吹いていることが何かでわかる。例えば、皆さんはイエスは救い主だと告白しますが、どうしてそんなふうに告白できるのですか。自分で考えて自分で決断して、告白したと思っているかもしれませんが、もちろん私たちは自由意志をいただいていますから、誰にも強制されないで告白できる。けれどもそれだけではない。もし聖霊の働きがなければ、誰もイエスは主ですと告白することができない。主を告白しているのであれば、その人には聖霊が宿っているのです。そればかりではなく、あなたがたは神の国をいただいている、幸いな人だということになる。

2) 聖霊を拒む人たち

では、イエスに敵対する人たちはどうでしょうか。聖霊が働いていないのか。いいえ、働いている。でも、彼らは聖霊の働きを頑なに拒んでイエスを認めようとしな。どうして頑なになるのでしょうか。もしイエスを主ですと認めるなら、これまで自分が語ってきたこと、人に教えてきたことを否定しなければならない。そんなことをしたら、折角の栄誉や名声を失うことになる。そんなこと

になれば人生の敗北者です。とても恐ろしい。だからイエスを主と認めたくないのです。弱さを認めたくないで、それを隠すために「自分は聖書のみことばを守っている」と言い張った。先ほど神のことばを守るとはどういうことかと問いかけました。彼らが反面教師となって教えてくれる。自分の弱さ、罪を認めてそのまま主に告白する人たちのことを指す。

3) 天のしるしとなられた方

そうしたら主はどうされるのか。この方は「最も強い方」であるのに、最も弱くなられ、栄誉も名声も捨て、皆に捨てられ、最期は十字架でいのちを捨てられました。イエス・キリストの信仰によって、この方が死からよみがえられたとき、悪魔は打ち負かされました。このようにして、この方は私たちが最も恐れていることをすべて経験されました。それでもこの方を拒むでしょうか。私たちの弱さを全部ご存じでそのまま受けとめてくださるのですから、どうして拒む理由があるのでしょうか。天からのしるしを求めた人たちは、目の前に天のしるしとなられた方が立っておられるのに、認めようとしませんでした。

この地上にあるものはいつか滅びていきます。希望と思えたものは消え去っていきます。しかしこの方が与えてくださる神の国、私たちの故郷は例えこの世界が滅びたとしても、永遠に天に輝き続けています。私たちはこの故郷を仰ぎ見ながら歩んで参ります。